

Claude Monet

Commemorating the 30th Year of the Museum's Opening and
the Centennial of the Artist's Death

開館30周年記念・没後100年 クロード・モネ展

2026年3月20日(金・祝)–2027年4月11日(日)

第1期 | Term 1

2026年3月20日(金・祝)–9月6日(日)

第2期 | Term 2

2026年9月19日(土)–2027年4月11日(日)

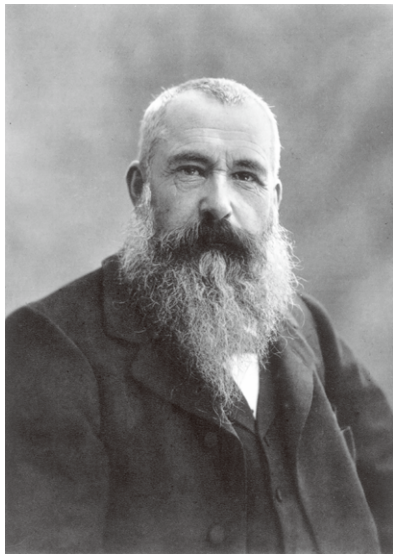
List of Works

作品リスト

Claude MONET クロード・モネ

1840–1926

フランス、パリに生まれ、5歳頃にフランス北西部ノルマンディー地方のル・アーヴルへ一家で移る。1859年、画家を志しパリへ出てオーギュスト・ルノワールらと交遊。戸外制作と、絵の具を混ぜずにカンヴァスに並置することで、視覚を通してひとつの色と認識させる筆触分割の手法を磨く。1874年に開催したグループ展に出品した作品名から「印象派」の呼称が生まれる。1880年代以降、同一モチーフを時間などの条件を変えて描く「連作」を追求。1883年から1886年まではル・アーヴルの北にある町エトルタに毎年逗留する。1890年、パリ北西のジヴェルニーに家と土地を購入。1899年頃からスイレンを描いた連作に着手する。1911年に2度目の妻を亡くし、翌年白内障の診断を受け、長男が病にたおれるといった苦しい時期を経て、1914年以降は大型のカンヴァス全体を水面に見立てて制作を行う。モネの死から半年後、パリのオランジュリー美術館の大きな楕円形の展示室を飾る「大装飾画」が公開された。



通期出品 | Entire period



通期出品 | Entire period

睡蓮

Water-Lilies

1914–17年 200×200cm

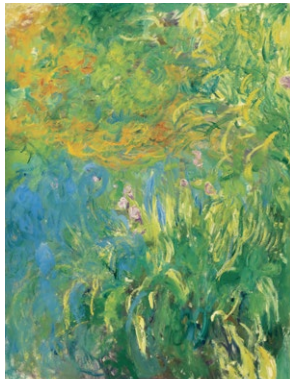
モネは1883年、フランス北西部の小村ジヴェルニーに移り住み、同地で後半生を過ごしました。晩年のモネが抱いたのは、巨大なスイレンの絵画によって部屋の壁面を覆う「大装飾画」の構想でした。現在オランジュリー美術館(フランス、パリ)で公開されている「大装飾画」のために、画家は1914年以降、大型の作品をいくつも制作するようになります。そのひとつである本作に描かれた池は、紫や緑の絵の具が複雑に塗りかさねられており、水面に混じりあう枝垂れ柳と空の反映がみごとに表現されています。画面左側には、木漏れ日によってきらめく水面も見られます。

睡蓮

Water-Lilies

1914–17年 180×200cm

モネはジヴェルニーで庭づくりに没頭し、1895年にはセーヌ川の支流から水を引いた「水の庭」を完成させ、庭で制作三昧の時を過ごします。「大装飾画」の準備期間に制作された本作は、円形に植えられたスイレンの葉が黄色に輝く様子が、日食時にあらわれる光の環を連想させることから、「コロナ」の愛称でも親しまれています。太く大胆な筆致によって、水中の茎まではっきりと描かれています。



通期出品 | Entire period

アイリス

Irises

1914-17年 200×150cm

アイリスはモネが好んだ植物のひとつで、池の岸辺にはさまざまな品種がたっぷりと植えられていたといえます。本作の画面中央には薄紫色のアイリスの花と、その下に茎や葉が見てとれます。画面中央から左下にみられる青色は、池の水面をあらわしているのでしょうか。奔放な筆さばきと鮮やかな色彩が迫力を感じさせる作品です。



通期出品 | Entire period

日本風太鼓橋

Japanese Bridge

1918-24年 89×93cm

モネの「水の庭」の池には世界各地からとり寄せた色とりどりのスイレンが浮かび、その上には、浮世絵を思わせる日本風の太鼓橋がかけられました。本作を描いたころ、モネの白内障は進行しており、ゆらめく大気のヴェールをまとったような画面からは、その影響が感じられます。



第1期出品 | Term 1

睡蓮

Water-Lilies

1907年 90×93cm

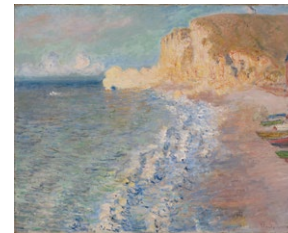
庭の水景、とりわけ池に浮かぶスイレンをテーマにモネは、最晩年まで数多くの連作を手がけました。比較的早い時期に制作された本作は、奥行きのある構図で、約90センチ四方の画面の中に、黄色やピンクのスイレンが描かれています。ほの暗い水面には、空と対岸の木々が映り込み、光を受けた葉の表面と対比をなしています。



第1期出品 | Term 1



第2期出品 | Term 2



第2期出品 | Term 2

睡蓮

Water-Lilies

1914-17年 130×152cm

本作では、円形に植えられたスイレンがやや上方から描かれています。白やピンクの色をかさねて描かれた4輪の花に加えて、画面左と右下には蕾の姿も見えます。

睡蓮

Water-Lilies

1914-17年 150×200cm

手前に描かれたスイレンの花は、構造が細かに描きこまれ、画面から立ち上がるような立体感があります。画面左上の単純化された白いスイレンとは対照的で、新しい赤色の品種に向けられた、画家の熱い視線が感じられます。

エトルタの朝

Morning at Etretat

1883年 65×81cm

フランス北西部、ノルマンディー地方の海岸線沿いに位置するエトルタは、石灰質の白い断崖がつづく景勝地として知られ、19世紀には多くの芸術家たちが訪れるようになりました。モネが初めてこの地を訪れたのは、1868年末のことです。1883年から86年にかけては、ほぼ毎年のように滞在し、季節や天候の変化に応じて複雑な地形を描きわけました。本作で描かれたのは、海岸線から大きく突き出たポルト・ダモンと呼ばれる崖壁です。朝の光に包まれた浜辺に、泡立つ波が寄せています。

1840年	11月14日、フランス・パリに生まれる
1845年	一家でノルマンディー地方の港町ル・アーヴルへ転居する
1858年	このころ、画家ブーダンと出会い、才能を認められる
1859年	パリに出る サロン(官展)で感銘を受けたトロワイオンを訪ね助言を受ける
1860年	画塾アカデミー・シュイスに通い、ピサロと出会う
1862年	画家グレールの画塾でルノワール、シスレーらと交友をもつ
1865年	サロンに出品、初入選 このころ、クールベ、マネの影響のもとに風景や戸外の人物を描く
1870年	普仏戦争を避けてロンドンに渡る ターナーなどの作品に感銘を受けて翌年帰国
1874年	第1回印象派展に《印象 日の出》を出品、以降第2、3、4、7回展に出品
1878年	帰国後に居を構えたアルジャントウイユからヴェトウイユへ転居する
1881年	パリ郊外のボワシーへ転居する
1883年	ル・アーヴルやエトルタを訪れて制作をする 終の住処となるジヴェルニーへ移り住む
1888年	最初の《積みわら》の連作に着手する
1890年	ジヴェルニーの家と土地を正式に購入、庭園の造成に情熱を傾ける
1892年	フランス西部のルーアンに滞在し《ルーアン大聖堂》の連作を手がける
1893年	ジヴェルニーの自宅に隣接した土地を購入し、「水の庭」をつくりはじめる
1899年	睡蓮や日本風太鼓橋をモチーフに連作を手がける
1911年	病床にあった妻アリスが亡くなる
1912年	白内障と診断される
1914年	睡蓮の大作を手がけはじめる
1918年	《睡蓮》大装飾画を国家へ寄贈する旨を首相クレマンソーに書簡で伝える
1926年	12月5日、ジヴェルニーの自宅で永眠する
1927年	《睡蓮》大装飾画がオランジュリー美術館で公開される

年譜 人名・用語説明

ウジェーヌ・ブーダン(1824–1898)

故郷のノルマンディーで戸外制作を行った

コンスタン・トロワイオン(1810–1865)

バルビゾン派の画家と交流し、風景や動物を描いた(当館本館階段上に油彩画《農耕》を展示中)

アカデミー・シュイス(フランス語:Académie Suisse)

パリで開講されていた自由な気風の私画塾

カミーユ・ピサロ(1830–1903)

デンマーク領(当時)カリブ海セント・トーマス島に生まれ、25歳で画家を志してパリに出る
年長のピサロは印象派展の画家らの仲をとりもった

シャルル・グレール(1806–1874)

スイス生まれの画家で、パリでアトリエを営み、若い画家を育成した

アルフレッド・シスレー(1839–1899)

フランス生まれのイギリス人で、パリ周辺の風景を描いた印象派の画家

ギュスターヴ・クールベ(1819–1877)

伝統的な絵画の決まりごとを破って社会の現実を描く、リアリズムを追求した

エドゥアール・マネ(1832–1883)

発展する近代都市パリの暗部を描きだす主題や平坦な人物描写で、当時のサロンに議論を巻き起こした

普仏戦争(1870–1871)

ドイツ統一の主導権を狙うプロイセンがフランスを刺激して起こった戦争。プロイセンがフランスに圧勝した

ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー(1775–1851)

光に満ちた風景や海のうねる波を描いたロマン派のイギリス人画家

第一回印象派展(1874)

フランス美術アカデミーの保守的な美の基準に迎合しない作品の発表の場をもとめて、
画家のオーギュスト・ルノワール、エドガー・ドガ、ポール・セザンヌ、シスレー、ピサロ、モネなどが
共同出資して開いた展覧会

オランジュリー美術館

1927年にパリのセーヌ河岸に開館した、印象派、後期印象派の作品を所蔵する国立美術館



作品には触れないようお願いいたします。
近づきすぎないように、じゅうたんの上でご鑑賞ください。

同時開催展覧会

2026年3月20日(金・祝)–9月6日(日)

開館30周年記念 山本爲三郎・河井寛次郎没後60年記念

共鳴 河井寛次郎×濱田庄司—山本爲三郎コレクションより

2026年9月19日(土)–12月6日(日)

開館30周年記念 ジョルジュ・ルオー —いつくしむまなざし、祈りの筆あと

2026年12月19日(土)–2027年4月11日(日)

開館30周年記念 萩尾望都展 —欧州への憧憬



アサヒグループ大山崎山荘美術館

〒618-0071 京都府乙訓郡大山崎町銭原5-3 TEL:075-957-3123(総合案内)
<https://www.30th.asahigroup-oyamazaki.com>

30th
since 1996
訪れるたび、
心がうごく

